



Title	「ティーノ作ハインリッヒ七世の墓とその装飾性への考察」
Author(s)	團, 名保紀
Citation	デザイン理論. 1994, 33, p. 82-83
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52735
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「ティーノ作ハインリッヒ七世の墓とその装飾性への考察」

團 名保紀／群馬大学

1315年、ピサ大聖堂内にティーノ・ディ・カマイーノにより築かれた神聖ローマ皇帝ハインリッヒ七世の墓は1494年、縮小移築され、ヴァザーリによりうちたてられたフィレンツェ中心的ルネッサンス美術史観の中で、その重要性は固く沈黙され続けて来た。しかし本来帝墓に属していた筈の彫刻要素を導入しての1983年の私による再構築案（図1）では、三層構造による全体の各層に肖像彫刻を配置し、凱旋門状アーチ等古代ローマ的記念碑性を訴え、既にルネッサンスへの影響につき示唆するものとなっていた。こうした帝墓のめざましい形体化には又ハインリッヒ七世に関わるティーノのピサ期作品群で昨今私の強調したフィオーレのヨアキム的理念、人類史に於ける父と子に続く聖靈、つまり第三の段階到来を皇帝の登場に見たてた当時のダンテに代表される千年王国的ユートピア思想も反映していた筈である。第三の段階への願いは帝墓の三層構造各層の彫刻配置で様々見極められる。例えば一階層、傭兵隊長父子像の出現で暗示される聖三位一体の祭壇奥、聖靈の入口たる窓から黄金時代到来への展望がなされる。祭壇の丸彫彫刻を支える基台部に四福音書記者が浮彫されるが、その上奥に窓が存在し、ヨアキム主義者の唱える「永遠の福音」の暗示となっている。四大元素の結実としての煉瓦に囲まれた窓は「第五要素から生まれる黄金」の概念に裏付けられた鍊金術的象徴空間たり得、あたかも黄金時代到来を心待ちするかの如くである。いずれにせよ帝墓の特質として古代回帰、聖俗の一致、肖像レアリズム、ヨアキム的理念、鍊金術的象徴等

が強調されダンテ的知性のもとイタリアが築き得た神聖ローマ皇帝の稀なる墓という文化、社会、歴史性の重みからも、その後の「世界と人間の発見」としてのルネッサンス形成に多大の影響を与えたものと思われるのである。

しかし帝墓の古典性、とりわけルネッサンス先取性を力強く体現した筈の建築的要素の具体的認定は、これ迄1980年に私がとり行った一階層の枠組たる螺旋円柱（図2），即ちローマのトライアヌス帝記念円柱を依り所としたものに限られ、凱旋門的大アーチの一階層に於ける存在は飽く迄推論によるものであった。そんな中、帝墓一階層の格間式樽形天井の断片として形体、様式から認定出来る大理石板二枚をこの度私は発見することが出来た。いずれも豊かな花を浮彫するもので一枚はその中央に幼児の顔を示している（図3.4）。雄しへ、雌しへを表した生命力満る肉厚の大輪の花はまずもってフィオーレ（花）のヨアキム的理念の象徴にふさわしいものである。又幼児は父と子に続く聖靈の段階の代表概念であり、螺旋円柱に於ても多出していった。さらに石板の円弧状に展開する縁部を見ると、古典的で洗練された装飾モティーフに注目させられる。パルメッタは勝利、栄誉の印として偉大な墓の主人公にふさわしいものである。それらに挟まれ海神ネプチューンの象徴、三叉の矛が出現している。実はピサ大聖堂では12世紀、グリエルモ工房により内陣障壁が設けられた際、かつてローマのネプチューンのバジリカの建築部位でパルメッタや三叉の矛を装飾にもつ大理石板を利用していた。つまり三叉の矛等新発見の石板の古典的

装飾モティーフは海洋都市ピサのネプチュー
ンへの深い思いの反映としてピサ大聖堂にロ
ーマより運ばれていた古代の第一級的装飾芸
術と結びつくものであり、今ハインリッヒ帝
の魂の發揮すべき諸力の象徴として帝墓に採
用されたものと思われるのである。かくして
凱旋門式アーチというとりわけ古典古代的特
質が強調される帝墓再構築図の正合性を、そ
の構造、形体、及び装飾分析から保証する新
たな建築部位の発見、認定により、帝墓が単
に建築、彫刻のみならず装飾的にも秀で、そ
れはモニュメントが発する重要メッセージの
象徴として機能し、その印象はまことに新鮮
なものがあったと認識されて来る筈である。
諸芸術ジャンル統合の範としての帝墓がその
後ルネッサンスの各方面に影響の輪を広げて
行く実相につき、今後さらなる検討を進めて
行きたく思うものである。

〈参考文献〉

N. Dan, *Tino di Camaino: Le colonne tortili di Pisa e di Londra* in "Prospettiva" 20, 1980, pp. 16-26.
 N. Dan, *La Tomba di Arrigo VII di Tino di Camaino e il Rinascimento*, Firenze 1983.
 團 名保紀, ティーノ・ディ・カマイノのピサ彫刻と
皇帝ハインリッヒ七世, 群馬大学教育学部紀要, 27, 1992,
pp. 59-100.
 同筆者, ティーノ作皇帝ハインリッヒ七世の墓のルネッ
サンスへの影響 [II] 最新発見作を踏まえ, 群馬大学教育
学部紀要, 29, 1994, pp. 23-53

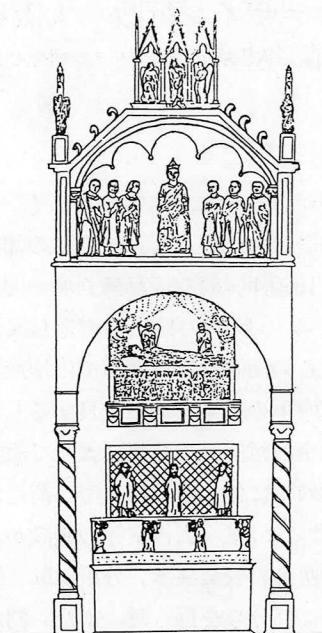


図1
皇帝ハインリッヒ七世の墓再構築図（團, 1983年）



図2
ティーノ・ディ・カマイノ, 螺旋円柱, ピサ大
聖堂付属美術館

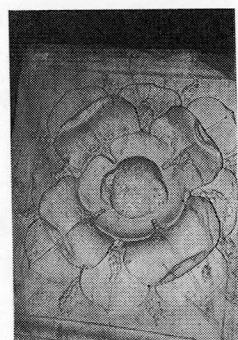


図3
ティーノ・ディ・カマイノ, 石
板, バニョ・ア・リボリ, 個人
蔵



図4
ティーノ・ディ・カマイノ, 石板, 個人蔵